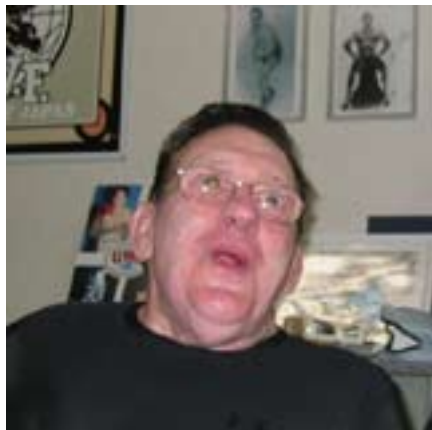




「人間風車」で知られた元プロレスラー ビル・ロビンソン&宮戸優光

ビル・ロビンソンさん UWF スネークピットヘッドコーチ

プロフィール：1938年生まれ。67歳。

欧州ヘビー級王座、英国ヘビー級王座、初代IWAヘビー級王座、AWA世界タッグ王座他。68年初来日し「人間風車」の異名をとる。日本にレスリングの極意を伝え、基礎を作った。現在のショー化したプロレスを「真の」レスリングに戻すために、若手育成に励む。http://www.uwf-snakepit.com/

著書に『高円寺のレスリング・マスター人間風車 ビル・ロビンソン自伝』。

■手首技だけでも100種以上－ 「人間風車」ロビンソンが技を語る



▲相手から手首を捕まれたときの技をレッスン中

インタビュー後、“Could you give me a short lesson, Bill?” (少し教えていただけますか?)と恐る恐る聞いてみた。たちまち破顔し、にっこりと、“Sure.”(もちろん)と快諾してもらったが、ジム代表取締役の宮戸さんもびっくりした顔で見ている。“There are more than 100 techniques just for the wrists. (手首だけでも100以上の技があるんだよ)”といいながら、丁寧にデモンストレーションを見せてくれる。「パワーじゃないんだ、パンチやキックだけの力じゃない、技で勝つんだ」と言いながら、相手から手首を捕まれたときの技を幾つか教えてもらった。柔道や護身術の覚えがある方は分かるだろう。どんなに強い力で握られても、「力」ではなく、関節のひねりを使えば、怪力の大男からでもすりと逃れる術はあるのである。そして、技の種類数は柔道の比ではないという。

■Snake Pit スネークピット

そのロビンソンさんがヘッドコーチを勤める「UWFスネークピットジャパン」は、杉並区高円寺にあるシュートレスラー養成機関。1999年元UWFインターのレスラーで「Uインターの頭脳」と呼ばれた、宮戸優光(1963年生)さんが設立した。その理念は、かつて英国はマンチェスターに実在し、ロビンソンさんをはじめ数々の名レスラーを輩出したビリー・ライレージム、通称・スネークピット(蛇の穴)に倣うものである。(ちなみに、劇画タイガーマスクの「虎の穴」とは、この「蛇の穴」のもじりだろうだ。宮戸さんはそのジムの「夢の空間」と呼ぶ。スネークピットは、レスラー養成だけではなく、年齢・男女を問わず一般に開放されたスポーツ格闘技ジムである。本物のプロレスを再生し、また男女のファンの底辺を広げたい、「そのために、ビリーを呼んだんです」と語る。ロビンソンさんもまた「本物のレスリングを若手に伝えたいという気持ち」が、宮戸さんの説得に最終的にYesと答えさせたという。二人が見つめている将来は今日明日のことではなく、「プロ・レスリング」というスポーツあるいはアートの壮大な未来である。



▲ロビンソンさんと宮戸優光さん

■Catch as catch can－ レスリングのルーツ＝ロビンソンのルーツ



▲UWFスネークピットジャパンのシンボルマーク

チャンピオンボクサーを父に持ち、格闘技の環境で育ったロビンソンさんは、13歳の事故による失明でボクシングを断念するも、レスラーの叔父アルフによってレスリングに興味を覚える。しかし、15歳でのビリー・ライレー・ジム(通称＝蛇の穴)入門当日は、ボクシング、サッカー、ラグビー、アマレスで鍛えた体も、プロレスラーにはかなわなかった。1940年代のことであり、プロモーターも介在せず、どちらかが勝つまでの賞金をかけた1本勝負という「闘い」で9万人を動員することがあったという時代である。そんな時代に、ロビンソンは18歳にして英国のアマチュアチャンピオン、19歳で欧州のチャンピオンと順調にタイトルをつかんでいった。そして、プロ転向。国外遠征では当然のように欧州チャンピオンタイトル(ヘビー級)ホルダーとなり、その他、アジア、中東を周り、ネパールでは王のための御前試合も披露した。1967年に英国ヘビー級王座を勝ち取り、翌年、日英チャンピオンシリーズに招かれ、ここで、必殺技の「人間風車(ダブルアーム・スープレックス)」で日本のファンの度肝を抜いたのである。初来日後は国際プロレスの外国人エースとなり、のちに新日本プロレスに参戦。60分フルタイムで

、

の戦いの末、引き分けとなったアントニオ猪木との激戦は今もなおファンの心に残る名勝負となった。

Catch as catch can(やれるものならやってみる)というランカシャー独特の言い回しが競技名となり、そのスタイルはオリンピックのフリースタイルや近代プロレスとなっていたという。ロビンソンさんのいう“the real wrestling”は、プロもアマもないまさしくレスリングのルーツなのである。Physical Chess(肉体を使ったチェス)と呼ばれるように、Catch-as-catch-canスタイルのレスリングは、パワーではなく知識と技術と戦術で相手を追い込み、コントロールする。そんな、ショー化していなかった時代のプロレス、純粋なプロレスを次世代に残したい、と語るロビンソンさんに驕りはない。かつてのレスリングを最強であり、最も美しいと呼ぶ彼の愛情がそうさせているのである。“The real wrestling 真のレスリング”の時代を知るのは、世界中でもう自分しか残っていない。そのすべてを「高円寺」で伝えていこう。1999年5月に、彼は移住の決意を持って日本に向かったのだった。

■ Learn how to Learn. — 学ぶことを学びなさい



▲右がビリー、左がルーテーズ

“Learn how to learn. 学ぶことを学びなさい”亡き師のライレーからの言葉を彼は繰り返す。現代の教育に通じるものを感じないだろうか。「先生、答えは何?」と聞く子供たちが増えている、マニュアルどおりにこなすだけの若者も多い。ロビンソンさんのジムで学べることはプロレスだけではないのだ。技、戦術、そして「学ぶことは何か」も含めて、ロビンソン氏のすべてがこの「高円寺」で伝道されている。ちなみに指導は英語であるが、即座に宮戸さんが日本語に訳すため問題はない。むしろ、英語を体得できるチャンスでもある。

る。また、練習に無理はなく、よい所はすかさずほめ、弱点を教えていく、自信につながる指導を取っているようだ。自信と意欲がなければ、「学ぶ」ことはできないものである。

■我が街、高円寺



▲練習風景

“There are so many good places in this town.”(この街にはいい場所がいっぱいあるんだ)。宮戸さんも「ビリーのほうが高円寺は詳しいですよ」というぐらい、高円寺にすっかりなじんでいるロビンソンさん。彼を受け入れる温かさが高円寺にはある。高円寺は、古着屋、ライブハウスなど、今も若者の心をひきつける街であり、また、著名人、文化人も多く輩出してきている。高円寺を愛する人々は多い。

スポーツ格闘技ジムであり、シュートレスラー養成機関である「スネークピット(蛇の穴)」が、プロレスの再生を望むのであれば、この懐の広い街を選んだのは正解だろう。ここに根を生やし、日本へ、世界へ広がっていった多くの轍が、それを物語る。The original wrestling(本来のレスリング)が、高円寺に根付き、葉を広げ、多くのファンとレスラーを魅了していくことを願っている。

(文：豊田のり子)